Press Release

HIGASHIKAWA HOKKAIDO JAPAN
— THE TOWN OF PHOTOGRAPHY —

2024年　第40回写真の町東川賞

受賞者発表
授賞式及びフォトフェスタ案内

写真文化首都
北海道「写真の町」東川町

第40回 写真の町東川賞受賞作家

＜海外作家賞＞ 対象国：フランス

ヴァサンタ・ヨガナンタン氏（Vasantha YOGANANTHAN）

受賞理由：長期プロジェクト「A Myth of Two Souls」における一連の作品に対して

＜国内作家賞＞

石川 真生氏（ISHIKAWA Mao）

受賞理由:展覧会「石川真生 ―私に何ができるか―」（東京オペラシティ アートギャラリー、2023年）に対して

＜新人作家賞＞

金川 晋吾氏（KANAGAWA Shingo）

受賞理由:写真集『長い間』（ナナルイ、2023年）、写文集『いなくなっていない父』（晶文社、2023年）に対して

＜特別作家賞＞

北海道101集団撮影行動（101 Group Photography Project in Hokkaido）

受賞理由：全日本学生写真連盟が1968～77年の間に行った北海道における19回の集団撮影行動に対して

＜飛彈野数右衛門賞＞

北井 一夫氏（KITAI Kazuo）

受賞理由:展覧会「フナバシ ストーリー」（船橋市民ギャラリー、2023年）に対して

第40回 写真の町東川賞審査会委員（敬称略／五十音順）

安　　珠	（あんじゅ）	写真家
上野　　修	（うえの　おさむ）	写真評論家
神山　亮子	（かみやま　りょうこ）	学芸員・戦後日本美術史研究
北野　　謙	（きたの　けん）	写真家
小原　真史	（こはら　まさし）	キュレーター・東京工芸大学准教授
柴崎　友香	（しばさき　ともか）	小説家
丹羽　晴美	（にわ　はるみ）	学芸員・写真論
原　　耕一	（はら　こういち）	デザイナー

第40回 写真の町東川賞審査講評

第40回写真の町東川賞審査会は、2024年2月21日に開催された。今年ノミネートされたのは、国内作家賞57名、新人作家賞64名、特別作家賞24名、飛彈野数右衛門賞51名、海外作家賞13名。例年どおり、午前中は写真集や資料をじっくりと閲覧し、午後から審査委員8名が合計182名の作家より5つの賞を選ぶ審査に入った。

国内作家賞は、沖縄を拠点に精力的な制作活動を続ける石川真生氏に決定した。初期からの主要な作品をはじめ、2014年から取り組んでいる「大琉球写真絵巻」シリーズの新作を中心に展示された東京オペラシティ アートギャラリーでの展覧会は、被写体との信頼関係を育みつつ展開される創作写真の独創性を照らし出すものでもあった。初期から現在にいたるまで、石川氏の写真表現に一貫しているのは、展覧会タイトルにもなっている「私に何ができるか」という明確な問いである。こうした独創性と一貫性の稀有な在りようが大きく評価された。

新人作家賞は、金川晋吾、菅実花、鈴木のぞみ、田口和奈、西野壮平、吉田志穂の各氏に絞り込まれた後、最終段階で金川晋吾、菅実花、西野壮平の各氏が残り、最終的に金川晋吾氏が選ばれた。失踪を繰り返す父親や20年以上消息不明だった伯母と、写真や文章で細やかに関わっていく金川氏の作品は、従来的な見る／見られる関係、撮る／撮られる関係を静かに揺さぶるものでもある。いっそう深みを増しつつあるその問いかけと、そこから生まれる写真表現の新たな可能性が決め手となったといえよう。

特別作家賞には、北海道101集団撮影行動が選ばれた。北海道101集団撮影行動とは、全日本学生写真連盟が1968年から77年の間に行った、のべ600人以上ともいわれる大学生たちが参加した匿名的な活動である。写真集にも展覧会にもまとまらず未完のままになっていたが、近年、写真や資料の収集、保管が進んでいることから、今回の受賞となった。特別作家賞の規定には「北海道在住または出身の作家、もしくは、北海道をテーマ・被写体とした作品を撮った作家」とある。ここで自明となっている作家とは、はたしてどのような存在なのか。北海道101集団撮影行動の受賞は、半世紀を隔て、この問いを現在に投げかけることにもなるに違いない。

飛彈野数右衛門賞は、北井一夫氏に決定した。村や町など普通の人々の暮らしと日常の風景を撮り続けてきた北井氏の展開は、「長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け」た仕事を対象とした同賞の規定にぴったりと合致するものである。1983年から1987年にかけて撮影された「フナバシ ストーリー」の、撮影された地である船橋市での展示は、北井氏の写真がかけがえのない船橋市民の記録と記憶となっていることを浮かび上がらせるものでもあった。これは同賞のもうひとつの規定、「地域に対する貢献」を示してあまりあるものだろう。

海外作家賞は、菊田樹子氏の調査に基づいた丁寧な説明を踏まえたうえで審査に移り、対象国のフランスから、ヴァサンタ・ヨガナンタン氏が選ばれた。ヨガナンタン氏は、古代インドの大長編叙事詩『ラーマーヤナ』を現代的に再話、各章ごとに1冊ずつ写真集化する長期プロジェクト「A Myth of Two Souls」を展開している。写真だけでなく、イラストレーション、インドの伝統的な着色、土地固有のイメージなどを織り交ぜた表現が高く評価された。

2020年の審査会後に深刻化していったコロナ禍も一区切りつき、ようやく例年どおりに戻った今年の審査会は、くしくも40回目の節目となる審査会となった。40年という年月は歴史と伝統という言葉で呼ぶに十分な長さだと思うが、その歴史と伝統は、絶えざる革新によって育まれてきたものでもある。さらなる発展に向けて、東川賞はどう革新していくべきか。今年の審査には、多かれ少なかれそのような思いが反映しているように思う。1985年の「写真の町宣言」から、2014年の「写真文化首都宣言」を経て現在に至るまで、その趣旨に共感した町の人々の多大な努力と、世界の人々の共感の力に導かれながら、新たな一歩を踏み出していきたい。

写真の町東川賞審査会委員　**上野　修**



第40回写真の町東川賞　＜海外作家賞＞　対象国:フランス

ヴァサンタ・ヨガナンタン（Vasantha YOGANANTHAN）

フランス・マルセイユ在住

1985年、フランス人の母とスリランカ人の父のもと、グルノーブル（フランス）に生まれる。ヨガナンタンは独学で写真を学び、最初の長期プロジェクトによる作品「Piémanson」（2009-2013）を制作する中で、優れた写真は時間の経過と結びついていることに気づいた。新しいプロジェクトは常に直感から始まり、時が経つにつれて自分が何をどのように撮りたいのかを理解するという。
2014年に出版社Chose Communeを共同設立し、『Piémanson』を刊行した。その後、インドの壮大な叙事詩『ラーマーヤナ』に触発され、現実と虚構の狭間を探求する7冊に及ぶ写真集のプロジェクト「A Myth of Two Souls」（2013-2021年）に取り組んだ。
「A Myth of Two Souls」は、エリゼ美術館（ローザンヌ、2019年）、シャネル・ネクサス・ホール（東京、2019年）、Deck（シンガポール、2020年）、ベルファスト・フォト・フェスティバル（2023年）で個展として開催。また、「Illuminating India 1857-2017」サイエンス・ミュージアム（ロンドン、2017年）、「Body Building」イシャラ・アート・ファウンデーション（ドバイ、2019年）、「Energy：Sparks from the Collection」ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館（ロンドン、2023年）などのグループ展でも展示された。
ヨガナンタンは、エマージング・フォトグラファー・オブ・ザ・イヤーとしてICPインフィニティ・アワードを受賞（2017年）するなど、いくつかの賞を受賞している。2019年と2021年には、写真集『Dandaka』と『Amma』がそれぞれアルル国際写真フェスティバル・フォトーテキストブック・アワード、パリフォト・アパチャーファウンデーション・フォトブック・アワードの審査員特別賞を受賞した。2022年には、エルメス財団がアンリ・カルティエ＝ブレッソン財団（パリ）およびICP（ニューヨーク）と提携し、フランスとアメリカで交互に行われる滞在制作プログラム「Immersion」に参加するなど、近年その活躍の場をさらに広げている。

<作家の言葉>

「A Myth of Two Souls」で東川賞海外作家賞を受賞し、光栄です。このプロジェクトは、2019年に世界のどこよりも早く東京で展示されたことで、すでに日本と強い絆で結ばれています。そして今、このプロジェクトが北海道の新たな観客に届くことは私にとって誇りであり、嬉しく思います。

ヴァサンタ・ヨガナンタン



Disappearance
Trivandrum, India, 2013



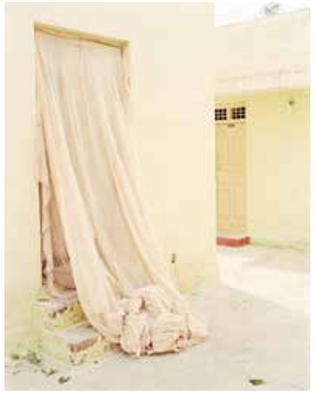
Longing For Love
Danushkodi, India, 2018



Lovebird
Ramtek, India, 2015



Rama Combing His Hair
Ayodhya, India, 2015



Secret Door
Avani, India, 2016



The Horse From The Sea
Danushkodi, India, 2018

作品はすべて「二つの魂の神話」より
from the series *A Myth of Two Souls*



第40回写真の町東川賞　＜国内作家賞＞

石川 真生（ISHIKAWA Mao）

沖縄県在住

1953年、沖縄県大宜味村生まれ。1970年代から写真をはじめ、1974年、WORKSHOP写真学校東松照明教室で写真を学ぶ。以降、沖縄を拠点に制作活動を行い、沖縄をめぐる人物を中心に人々に密着した作品を制作している。90年代までの主な写真展に、1977年「金武の女たち」（ミノルタフォトスペース／東京）、1989年「フィリピン」、1990年「港町エレジー」（いずれも那覇市民ギャラリー／沖縄）、1991年「仲田幸子一行物語」（りうぼうホール／沖縄）。2000年代には国内外の企画展に参加。主なものに2003年「KEEP IN TOUCH: POSITIONS IN JAPANESE PHOTOGRAPHY」（グラーツ市美術館／オーストリア）、2004年「ノンセクト･ラディカル 現代の写真Ⅲ」（横浜美術館／神奈川）、2004年「永続する瞬間 ― 沖縄と韓国 内なる光景」（MoMA PS1／アメリカ）、2008年「沖縄プリズム 1872-2008」（東京国立近代美術館／東京）がある。
2011年、『FENCES, OKINAWA』で、さがみはら写真賞を受賞。2014年に写真展「大琉球写真絵巻パート1」（那覇市民ギャラリー）を開催以降、毎年、本シリーズの制作発表を続けている。2019年、日本写真家協会賞作家賞を受賞。その後も精力的に活動を展開し、2021年「石川真生展 : 醜くも美しい人の一生、私は人間が好きだ。」（沖縄県立博物館･美術館／沖縄）、2023年「石川真生 ―私に何ができるかー」（東京オペラシティ アートギャラリー／東京）を開催。2024年、第74回芸術選奨文部科学大臣賞、第43回土門拳賞を受賞。釜山ビエンナーレ2024（韓国）、「ライフ2 すべては君の未来」（熊本市現代美術館／熊本）に参加予定。
主な作品に、「金武の女たち」（1977）、「熱き日々 in キャンプハンセン!! 」（1982）、「LIFE IN PHILLY」（1987）、「フィリピン」（1989）、「港町エレジー」（1990）、「仲田幸子一行物語」（1991）、「沖縄の自衛隊」（1995）、「沖縄の米軍」（1996）、「沖縄海上ヘリ基地」（1998）、「日の丸を視る目」（1999）、「大琉球写真絵巻パート1～10」（2014～2023）がある。現在も国内外で広く写真を発表し、沖縄県立博物館･美術館のほか、東京都写真美術館、福岡アジア美術館、横浜美術館、国立国際美術館、ヒューストン美術館（アメリカ）、メトロポリタン美術館（アメリカ）など、パブリックコレクションにも多数収蔵されている。

＜作家の言葉＞

第40回写真の町東川賞を授与させていただき誠に有難うございました。50年余りの間、沖縄を拠点にして、沖縄をとり続けてきた私にとっては励みになる賞です。これからも沖縄をとり続けていきますので、よろしくお願い申し上げます。

石川真生



沖縄芝居―仲田幸子一行物語
Uchinaa Shibai (Okinawa Play):
A Story of NAKADA Sachiko's Theater Company
1977-1992
南風原町(津嘉山公民館)、1981年6月
Haebaru Town (Tsukazan Community Center), *June 1981*



沖縄芝居―仲田幸子一行物語
Uchinaa Shibai (Okinawa Play):
A Story of NAKADA Sachiko's Theater Company
1977-1992
仲田幸子（1933-）劇団でいご座座長。三枚目が当たり役、1978 年頃
NAKADA Sachiko (1933-) is the chairperson of Deigo-za Theater Company. She excels in performing comedic roles *c. 1978*



港町エレジー
A Port Town Elegy
1983-1986



沖縄芝居―名優たち
Uchinaa Shibai (Okinawa Play): Great Actors
1989-1992
兼城道子さん
Ms. KANESHIRO Michiko



大琉球写真絵巻
The Great Ryukyu Photo Scroll
2013-2014

パート 1-22
「沖縄に災いを持ってくるな～！」と、日本に向かって祈るカミンチュ（神人）。
Part 1-22
"Don' t bring misfortunes to Okinawa!"
A kaminchu (Okinawan priestess) prays towards Japan.



大琉球写真絵巻
The Great Ryukyu Photo Scroll
2021-2022

パート 9-23
「沖縄でバイレイシャル（ミックスルーツ）として生きること」
【親富祖大輔（41 歳）、愛（39 歳）、ティーダ（11 歳）、
ユンタ（10 歳）、ニヌファ（6 歳）、カナヨー（3 歳）】
Part 9-23
"Living as biracial (mixed-roots) in Okinawa"
[OYAFUSO Daisuke (age 41), Ai (age 39), Tiiida (age 11), Yun- ta (age 10), Ninufa (age 6), Kanayooo (age 3)]



第40回写真の町東川賞　＜新人作家賞＞

金川 晋吾 (KANAGAWA Shingo)

東京都在住

1981年京都府生まれ。大学在学中にインターメディウム研究所に通い、写真家の鈴木理策のワークショップを受ける。写真を撮り始めたころは、写真によって生じる「切断」の機能、いわば「よくわからなくする」写真のありようにひかれ、対象やテーマなどは設定せずにスナップ写真を撮る。2000年に入学した大学を2年休学し6年目の2006年に写真「ひとつぼ」展に入選。就職活動はやったがうまくいかなかったので、コンペ入選をなんとなくの言い訳にフリーターになり、アルバイトをしながら写真を撮るようになる。だが、次第に自分の写真がパターン化しているように感じ、これまでのいわば「無意味」を志向するような方向性では続けられなくなる。将来への不安に駆られ胃腸も悪くする。環境を変えようと2008年東京藝術大学の大学院を受験し、進学できることに。ただ、それでも何を撮ればいいのかわからずに迷走しているとき、父が数年ぶりにいなくなる。父はしばらくして戻ってきたが何もせずに家にいるようになる。このことを機に、これまではやらなかったことをやってみようと思い、父を撮り始める。父と関わるなかで起こったことや感じたことを日記につけるようになる。父を撮ることで、写真には思いのほか様々なものが写ってくることを実感し、写真と出会い直す。2016年に青幻舎より『father』刊行。『father』という作品によって父が「失踪する父」として固定されていくことへの反動として、失踪ばかりしているわけではない父のことや自分のこと、写真のことについて書いた『いなくなっていない父』を2023年晶文社より刊行。今では言葉を書くことが自身の活動にとって欠くことのできないものになっている。
2010年より病院で暮らしている伯母の身元引受人になり、たまに会いに行って写真を撮るようになる。2020年に伯母が亡くなるまでの写真と日記で構成された『長い間』を2023年ナナルイより刊行。父や伯母についての日記を書くなかで日記というメディアへの関心が高まり、日記に関するワークショップのファシリテーターをおこなうようになる。
現在は、長崎の平和祈念像やカトリックの文化、自身の信仰等々について扱った『祈り／長崎』を制作中で、書肆九十九より刊行予定。また、複数人で暮らしている自身の生活を撮影した作品も制作中で、こちらも出版に向けて編集作業を進めている。

＜作家の言葉＞

このたびは東川写真新人賞をいただき誠にありがとうございます。写真に撮られることを受け入れてくれた父と伯母に深く感謝したいです。
『father』を出版する前、話をするために父に会いに行きました。自分のことが主題となっている本が世に出ることについて、父の気持ちを聞いておきたかったからです。
父は「お前が本にしたいならそうしたらいい」と言ってくれました。その反応は予想通りだったのですが、私が本当に聞きたかったのは「私の思いどうこうはさておき、あなた自身はこの作品のことをどう思っているのか」ということでした。ただ、私がいくら聞き方を変えて尋ねても、父の答えは「お前がしたいならしたらいい」以上のものではありませんでした。
父はそのとき次のようなことも言いました。「お前がやっていることが何なのかを理解しているわけではない。でもだからと言って、お前がやっていることにどうこう言いたいとは思わない」
このような私と父の関係がよいものだと言いたいわけではありません。むしろあやうさを孕んでいるとも言えると思います。ただ、このような関係のなかで父が私に自分自身を差し出してくれたからこそ、『father』のような作品が生まれました。
写真という場において自身の存在を私に差し出してくれた父と伯母に、今回の受賞を捧げたいです。

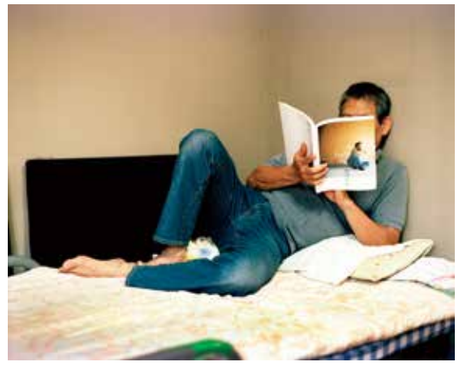
金川晋吾



father
2009



father
2009



いなくなっていない父
My father, still here
2016



長い間
for a while
2012



長い間
for a while
2011



長い間
for a while
2015



第40回写真の町東川賞　＜特別作家賞＞

北海道101集団撮影行動
(101 Group Photography Project in Hokkaido)

「北海道101集団撮影行動」の「101」とは、1969年を指す。「明治元年（1868年）から101年目の北海道をドキュメントする」として、当時の全日本学生写真連盟（略称·全日）が1968年に北海道学生写真連盟との連名で全国の大学写真サークルに参加を呼び掛け、翌69年から撮影を開始した。提起したのは写真評論家の福島辰夫である。
1960年代から70年代前半にかけて、日本のみならず世界各地で反戦運動や学園紛争が沸き起こった。その中で「写真で何ができるか?」を自らに問うた学生たちによる写真運動を全日が開始した。「北海道101集団撮影行動」はその一つである。1968年に開催された「写真100年 日本人による写真表現の歴史」展での、田本研造らによる北海道開拓初期写真群の優れたドキュメンタリー性に触発されたことが契機となり、北海道の現実に写真で、そして集団で向き合おうとした。
合宿形式をとり、77年夏までの9年間に全道各地で19回の撮影を行った。全国から延べ600人を超える学生が参集し、撮影された写真は膨大な数に上る。写真集出版を目指すも未完である。

<作家の言葉>

「北海道101集団撮影行動」の写真は、2013年に東京都写真美術館で開催された「日本写真の1968」展にて、同美術館専門調査員で写真史家の金子隆一氏（「北海道101」初動メンバーの一人、立正大）が一部を紹介して以来、公開されることはありませんでした。このたび出展する写真はそのときの展示枚数を遥かに超えますが、それでもまだ全てではありません。
また、今回の東川賞受賞を機に、かつてのメンバーの一人で、田本研造らが遺したオリジナルプリントを68年当時、函館市博物館などで丹念に複写していた故澤田彰さん（旭川市出身、酪農学園大）の貴重なフィルムを、ご家族のご好意により展示に加えることが出来たことは大きな喜びとなりました。
集団での撮影行動は1977年で中断しましたが、出版を目指す私たちにとっては今も「北海道101」は続いています。

北海道101集団撮影行動















第40回写真の町東川賞　＜飛彈野数右衛門賞＞

北井 一夫（KITAI Kazuo）

千葉県在住

1944年、旧満州鞍山（あんざん）市生まれ。日本大学芸術学部写真学科中退。
65年に、アメリカの原子力潜水艦が横須賀に寄港することに反対する全学連のデモ活動を撮り下ろした写真集『抵抗』を自費出版する。69年から、新東京国際空港反対闘争を記録した「三里塚」を『アサヒグラフ』に連載。闘争に身を置く農民たちの日々を内側から捉えた作品は高い評価を獲得し、72年に第22回日本写真協会新人賞を受賞。74年から『アサヒカメラ』に「村へ」を連載。同作で76年に第1回木村伊兵衛写真賞を受賞した。81年に大阪の庶民生活を取材した『新世界物語』、89年に東京のベッドタウンとして発展した千葉県船橋市で生活する人々を文章と写真で綴った『フナバシ ストーリー』を刊行。2012年には、東京都写真美術館で回顧展「いつか見た風景」が開催された。2013年に60年代からの制作活動に対して日本写真協会賞作家賞を、2017年にはParis Photo 2017 Guest of Honor for Paris Photo by Karl Lagerfeld, J.P Morgan Curator's Highlightsを受賞した。
主なパブリック・コレクションに、船橋市役所（船橋市）、東京都写真美術館（東京）、宮城県立美術館（仙台）、東京国立近代美術館（東京）、シカゴ美術館（アメリカ）、ヒューストン美術館（アメリカ）、Pier 24 Photography（アメリカ）、サンフランシスコ近代美術館（アメリカ）、JPMorgan Chase Art Collectionなど。

＜作家の言葉＞

写真を撮りはじめてからもう60年になる。1964年20歳のときから写真を撮り、70年には「アサヒグラフ」などの週刊誌に掲載されるようになった。日本の70年前後は雑誌全盛の時代で、あらゆるジャンルの雑誌が競争して出版し、カメラ雑誌、グラビア写真雑誌も多数あった。そういう時代に写真家になって、ずっと撮り続けていた私の写真は、古くから続く村の人々の生活とその場の風景であり、それはどれも雑誌掲載のための写真だった。
雑誌のための写真は忙しいもので、撮影してすぐにフィルム現像、プリントをして翌朝にはできたばかりの写真を届けることがよくあった。思い返すと、いままでよくやってこれたという気がします。
この度は飛彈野数右衛門さんから「ご苦労さん」と言われたような受賞でとてもうれしいです。
ありがとうございました。

北井一夫













団地と新興住宅地に暮らす人々、撮影年代1983-1987年
「フナバシ ストーリー」より
People living in housing complexes and new residential areas, photographed in 1983-1987
from the series, Funabashi Story

第40回 東川町国際写真フェスティバル

～写真の町東川賞関連事業2024～

＜受賞作家作品展＞

会期：8月3日（土）～9月2日（月）　会期中無休

時間：10：00～17：00（8月3日は15：00～21：00）

会場：東川町文化ギャラリー

料金：100円（8月3日、4日は無料開放）

海外作家賞……ヴァサンタ・ヨガナンタン

国内作家賞……石川真生

新人作家賞……金川晋吾

特別作家賞……北海道101集団撮影行動

飛彈野数右衛門賞……北井一夫

●8月3日（土）

13：30～14：30　授賞式（会場：東川町農村環境改善センター・大ホール）

15：00　テープカット（会場：東川町文化ギャラリー）

17：00～18：30　レセプション「受賞を祝う集い」

●8月4日（日）

13：00～17：30　受賞作家フォーラム（会場：東川町文化ギャラリー）

パネラー：東川賞受賞者、東川賞審査会委員、ゲスト

※感染症防止等のため、事業が変更・中止・延期となる可能性がございます。

■■■　写真の町とは　■■■

1984年、東川町に開墾の鍬がおろされてから満90年のとき。10年後に迎える100年に向け、後世に引き継いでいく町の未来をどのように思い描くかを考えました。東川町は大雪山国立公園の大自然に恵まれた町であり、多くの写真の被写体となってきました。この美しい環境を後世のために守り育てながら、人々がいきいきと暮らす町であり、住民でありたい。そして、この若い町よりも、わずか半世紀ほど早く生まれた若い文化である写真。若い町が若い文化に取り組むことで、どこにもない独自の文化や新しい伝統を育てることができる。そうすることでこの町が日本や世界での役割を担い、心豊かな暮らしを育んでいくことにつながると考えました。

1985年6月1日、東川町は豊かな文化田園都市づくりをめざして、とてもユニークな「写真の町宣言」を行いました。写真文化によって町づくりや生活づくり、そして人づくりをしようという、世界でも類例のない試みです。出会いを永遠に記録する写真による、町の美を永遠にとどめるための活動は、今もさらに展開し続けています。

この「写真の町宣言」にうたわれた、写真によって出会いにみちた町にしようという理念を実現し、「写真の町」の一年間の集大成と翌年への新しい出発のための祭典として、1985年から毎年夏に「東川町国際写真フェスティバル」（通称：東川町フォトフェスタ）が開催されています。

東川町フォトフェスタは、全体の会期を約１カ月とし、７月末から8月頭に設定されたメイン会期には、写真の町東川賞授賞式を中心に、受賞作家作品展やフォーラム、東川賞歴代受賞作家屋外写真展、写真家たちと出会う各種パーティ、新人写真家の登龍門ともいえる写真インディペンデンス展、写真愛好家・大学生によるストリートギャラリー、写真と音楽のコラボレーションなど、写真が異分野の文化と出会うイベントも多数行われます。

また、メイン会期の前後には、各種写真展や写真ワークショップ、写真教室、町民写真展、小学生から中学生を対象とした写真少年団活動など、会期全体を通じて、芸術としての写真から大衆的な写真とのかかわりまで、訪れる人々や町民に幅広いプログラムで写真文化の魅力を伝えています。

さらに、1994年からはじまった、全国の高校の写真部やサークルを対象にして行われる「全国高等学校写真選手権大会」（通称：写真甲子園）では、地元サポーターの応援のもと、全国から集った高校生たちが北海道を舞台に写真を撮影し、熱戦を繰り広げます。

2014年3月6日、30年に亘る「写真文化の積み重ね」、そして地域の力を踏まえ、私たちは未来に向かって均衡ある適疎な町づくりを目指し、「写真文化首都宣言」を行いました。「写す、残す、伝える」心を大切に写真文化の中心として、写真文化と世界の人々を繋ぐ役割を担うことを決意するものです。

■■■　写真の町東川賞規定　■■■

●趣旨
写真文化への貢献と育成、東川町民の文化意識の醸成と高揚を目的とし、これからの時代をつくる優れた写真作品（作家）に対し、昭和60年（1985年）を初年度とし、毎年、東川町より、賞、並びに賞金を贈呈するものです。

●賞
写真の町東川賞＜海外作家賞＞　　１名　賞金１００万円
写真の町東川賞＜国内作家賞＞　　１名　賞金１００万円
写真の町東川賞＜新人作家賞＞　　１名　賞金　５０万円
写真の町東川賞＜特別作家賞＞　　１名　賞金　５０万円
写真の町東川賞＜飛弾野数右衛門賞＞１名　賞金　５０万円

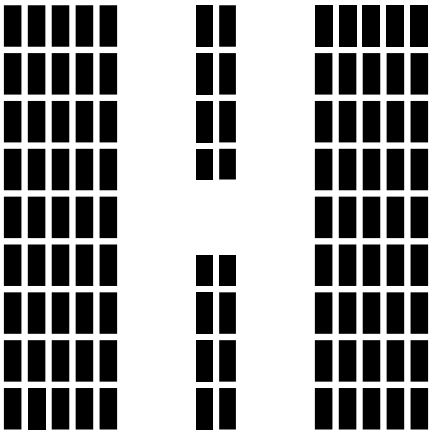
●対象
海外作家賞は、世界をいくつかの地域に分割し、年毎に、その対象地域を移動させ、やがて世界を一巡するものとし、発表年度を問わず、その地域に国籍を有しまたは出生、在住する作家を対象とします。
国内作家賞及び新人作家賞は、発表年度を過去３年間までさかのぼり、写真史上、あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品を発表した作家を対象とします。
特別作家賞は、北海道在住または出身の作家、もしくは、北海道をテーマ・被写体とした作品を撮った作家、飛弾野数右衛門賞は長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者を対象とします。

●審査・表彰
東川町長が依頼するノミネーターにより推薦された作家を、東川町長が委嘱した委員で構成する［写真の町東川賞審査会］において審査します。また、授賞式は毎年、東川町国際写真フェスティバル開催期間内に東川町内で行い、あわせて受賞作品展、記念フォーラム等を開催します。

●その他
受賞者には対象作品の中から任意に、東川町民にオリジナル・プリントを寄贈していただき、東川町民は、その作品を永久的に、大切に保管し、写真の町・東川町を訪れる人々に公開する責任をもち、［写真の町・東川町文化ギャラリー］に展示し、友好や文化に貢献できるよう努めます。
賞の対象数は、これを固定するものではありません。より多くの優れた作家に贈呈することを、目的の発展と考えます。他者からの賞の増設・新設申し出等に関しては、積極的に合議します。

フォトフェスタHP

東川町 HP　https://higashikawa-town.jp/
フォトフェスタ HP　https://photo-town.jp/
https://twitter.com/Higashikawa_PF
https://www.facebook.com/Higashikawa.PF/
https://www.instagram.com/higashikawa_pf/



〈お問い合わせ先〉

写真文化首都 北海道「写真の町」東川町

〒071-1423　北海道上川郡東川町東町1丁目19番8号　東川町文化ギャラリー内
東川町役場 写真の町課（担当：竹田・吉里）
TEL.0166-82-2111/FAX.0166-82-4704
E-mail: photo@town.higashikawa.lg.jp
https://photo-town.jp/

※受賞作家の顔写真及び作品画像をデータにてご用意しております。

※作品画像は受賞作家作品展出品作に限りません。